

を取り上げ、それらとジェントリフィケーションとの関係性を示唆する工夫が施されている。例えば東京都中央区における路線価の推移と土地利用の相関関係（第3章）は、主題図としても興味深く、バブル経済崩壊後の東京中心部の路線価低迷と、その後の集約的土地利用の発生要因との関係性が示されている。同時に本書では大都市（本著では「世界都市」）である京都、東京、ニューヨーク、ロンドン、ベルリン、大阪の中心部、すなわちインナーシティの構造に関する紹介もなされており、さらには全編に渡って地図・写真が多用されているため、都市地理学の専門家のみならず、それ以外の研究者や学生にも是非一読をお勧めしたい良書である。

本著の著者である藤塚吉浩氏（大阪市立大学）はジェントリフィケーション研究の専門家であり、本書でも様々な世界都市の紹介がされているが、その軸は一貫して「ジェントリフィケーション」に置かれている。そのため、都市に興味の少ない読者であれば躊躇しがちな世界「都市」を扱っている書籍の中でも、各国に関する詳細な背景知識や海外都市の個々の地理的名称に関する予備知識がなくとも内容が理解できるという側面も持っているといえよう。

末筆として今後、例えば本著でも取り上げられていた東アジア諸国（第3章）、旧社会主義国（第9章）の研究の発展も期待されるし、または近年、文化人類学分野などの隣接諸分野で進められつつあるアフリカ諸国等は、植民地経営の時代にアングロサクソンの都市開発の影響を少なからず受けた例であり、こうした最新の研究を含め、全世界におけるジェントリフィケーション研究の動向も待ち望まれるところである。

（池田真利子）

宮澤 仁編：『地図でみる日本の健康・医療・福祉』明石書店, 2017年3月刊, 204p., 3700円（税別）

本書の編著者である宮澤氏は「はじめに」で本書の特徴を簡潔に示している。すなわち、「日本の健康・医療・福祉に関する図解事典」であり、「地図」を中心に据えて事項を解説」していること、さらに「保健・医療・福祉の分野で相互の連携が重視されていること」を踏まえてこれらに関わる事項を網羅していることである。

本書の執筆者は編著者の宮澤氏を含め18名に及ぶが、彼らは保険・医療・福祉の各分野で実績のある研究者である。それぞれの研究者の有する研究課題は様々であり細分化されている部分もあるが、本書は、地図という共通の道具を用いたことで、保険・医療・福祉という非常に幅広いテーマを一つの軸で網羅し、共通性や個性を理解することを可能にしている。

さらに保険や医療を対象とした書籍であるが、執筆者が地理学の研究者であることも本書の重要な特徴である。この点について、宮澤氏は「おわりに」において「地域を多面的に把握すること、また、他地域との比較を通じて自地域を相対化すること」が肝要であり、そのために地理学的視点が重要であると説明している。本書には多数の地図が掲載されているが、それらから地域の特徴を把握し地域間の比較からその特徴を文章で説明するのは、地理学を学んだ者の得意とするところであり、本書では地図から何を読み取ることができるのか、丁寧な解説が付されている。さらに、カルトグラムや経路距離に基づくバッファー分析などの地理学的な分析を用いることで、より詳細な分析や考察も行っている。このように、地図を活用した考察や記述という点が、保険や医療に関する類書に比した際の本著の大きな特徴であり、地理を専門とする者が執筆した効果が発揮されてい

ると言えよう。

さて保険・医療・福祉の各分野を網羅する本書であるが、構成にも工夫がこらされている。まず取り上げられるのは、医療や福祉の需要と密接に関わる、日本の人口の全体像である。「第Ⅰ部 人口の状態と健康」と題して、人口変動や移動、世帯類型や保険行動などの八つのテーマが取り上げられる。その上で、「第Ⅱ部 医療」では医療機関や救急医療などの6テーマ、「第Ⅲ部 出産・子育て期の保健と福祉」では妊産婦と子どもの医療・保険や保育サービスなどの5テーマ、「第Ⅳ部 高齢期の福祉」は介護保険や地域包括ケアシステムなど8テーマ、「第Ⅴ部 障害のある人の福祉」では障害者支援施設やバリアフリー整備などの4テーマ、「第Ⅵ部 生活困窮者に対する福祉」では失業や生活保護など4テーマが取り上げられる。この第Ⅱ部から第Ⅵ部は、人々の生活の様々な場面で必要とされる保険・福祉の実態について解説がなされる。そして「第Ⅶ部 保険・医療・福祉の担い手」として社会保障分野の就業者、専門職の労働力需給と賃金、福祉の担い手としての住民セクターの3テーマが取り上げられる。福祉の担い手については、労働力の不足や待遇面での問題が報道されるなど、社会的な注目は高まっている。保険や福祉の抱える問題点を示しても、それを改善するには福祉を現場で支える人が不可欠である。彼らの抱える問題点を把握し解決できなければ、福祉の改善には繋がらない。本書の最後に担い手に関する議論を示したところに、福祉の現場を見てきた著者らの切実な思いが込められているように感じる。

本書を一読して感じるのは、編者・著者の読者に対する配慮の細やかさである。一つのテーマには日本全体を対象とした地図とそれに関する図表が示され、解説文が付される。各テーマは4ページで完結しているため、関心のあるところ、ある

いはたまたま手に取ったところからでも気軽に読み進めていくことができる。解説文中には、関連するテーマの番号が付されているので、その指示に従って読み進めていけば、自分の知らなかった分野についても理解を深めることができる。このように、項目間の関連を示し、読者を誘導していくことで、保険・福祉・医療を総合的に把握することができるように意図されている。

また、健康や福祉に関する社会的な関心の高い現在、本書は多くの読者の注目を集めることが予想される。しかし保険や福祉というタイトルに惹かれた読者の中には、地図に慣れた地理学の専門家ではなく、地図や空間的な分析になじみのない人々が多いことが想定される。そこで本書では、第Ⅰ部からの本論が始まる前に「本書で用いた地図表現と分析手法」と題した解説を設け、階級区分図や図形表現図、カルトグラムなどの各種の地図に関する基本的な読み取り方や、修正ウィーバー法による類型化や経路距離を考慮した近接性の把握などの分析手法を説明している。このことで、読者（特に地図に不慣れな読者）は、地図を単なる絵ではなく分析・考察のための道具として用いることを知り、さらに本編で解説文を読むことで、地図から様々な情報を読み解く過程を追体験できる。このことは、本書の理解を助けることはもちろんだが、読者に地理学の視点や分析手法を伝える役割も果たしていると言えよう。

このような著者たちの様々な工夫は、地理学を研究者がその成果や考え方を社会にどうアピールするかを考える上でも参考になる。その意味で、健康や福祉を専門とする者に限らず、地理学に関わるすべての人に大いにお薦めしたい。

本書は、編著者の宮澤氏を代表者とする科学研究費補助金の基盤研究「『社会保障の地理学』による地域ケアシステム構築のための研究」で実施している様々な研究課題の中でも、全国自治体を

対象とした実態把握に関する分析の成果であるという。本書で得られた成果を基礎として、日本の健康・福祉・医療に関する様々な研究が今後展開され、この分野に関する研究が一層深化することを期待したい。

(平井 誠)

若林芳樹・今井 修・瀬戸寿一・西村雄一郎編：
『参加型GISの理論と応用—みんなで作り・使う
地理空間情報—』古今書院, 2017年3月刊, 3,800
円(税別)

PGISという言葉を知ったことはあるだろうか？

PGISとは本書のタイトルにある参加型GIS (PGIS: Participatory GIS) を指す。本書によると、もともとは市民参加型GIS (PPGIS: Public participation GIS) だったが、より広い領域を指す用語としてPGISが定着してきている。用語の変容に見られるように、海外では理論の面でも応用の面でも活発な議論が展開されている。本書は、PGISが生まれた経緯、PGISを支える技術の発展によってPGISがどのように変わってきたのか、またその理論と応用について包括的にまとめたものである。本書の構成は、以下の通り三部構成、全27章からなる。

序章 参加型GIS (PGIS) の展開

第I部 PGISの理論

- 1 PGIS研究の系譜 (その1)
- 2 PGIS研究の系譜 (その2)
- 3 ジオデザインにおける市民参加の可能性
- 4 地元学とPPGIS
- 5 地理空間情報のクラウドソーシング
- 6 カウンターマッピング
- 7 地理空間情報の倫理

第II部 PGISを支える技術と仕組み

- 8 PGISとオープンガバメント・オープンデータ
- 9 PGISの活動とオープンソースGIS・オープンな地理空間情報
- 10 PGISのハードウェア
- 11 PPGIS教育ツール
- 12 PGISのための人材育成
- 13 先住民マッピング

第III部 PGISの応用

- 14 クライシスマッピング
- 15 ハザードマップと参加型GIS
- 16 放射線量マッピング
- 17 通学路見守り活動における地図活用
- 18 地域づくり：能登島の事例
- 19 市民参加型GISによる祭礼景観の復原
- 20 ICTプラットフォームによる市民協働型の課題解決
- 21 子育てマップと当事者参加
- 22 ボランティア組織による地図作製活動を通じた視覚障害者の外出支援
- 23 介護カルテ：西和賀町の事例
- 24 位置情報とARを用いたまち探検
- 25 大学教育と参加型GIS
- 26 海外におけるオープンガバメント・オープンデータの実践事例
- 27 日本におけるオープンガバメント・オープンデータの実践事例

序章にて本書のねらいは『PGISの理論、方法、実践にまたがる様々な話題を取り上げ、内外の事例にもとづいて現状と課題を検討すること』と宣言された通り、PGISに関する社会的な背景から最新の事例までを体系的に網羅した意欲的な一冊となっている。僭越ながら評者が推薦する読み進め方としては、序章でPGISの概要について押さ